

説明文の教材分析の方法と授業構想について —— 説明文「じどう車くらべ」を例にして ——

1、説明文教材の授業改善の方向

読み手が、書き手の視点をふまえ、その発想の方向をふまえて自らの思考空間を作り上げていくとき、読みは読み手にとって発見の行為となる。

(小田迪夫「説明文教材の授業改革論」 明治図書)

かつて、小田氏は、説明文教材の授業改革について書かれた著書の中で、このように述べられた。氏が提案された「自らの思考空間を作り上げていく」説明文教材の学習は、学校現場において、どう受けとめられてきたのだろうか。そして、そのための教材分析の方法や授業の構想のあり方は、どのように検証されてきたのであろうか。氏の提案は、説明文教材の授業改善を考えていく上で、今なお問われるべき重要な問題を提起している。

小田氏の指摘にあるように、説明文教材の読みにおいて、読み手が叙述に即して自らの思考を展開し、自分にとっての情報の意味を発見していくためには、「書き手の視点」と「発想の方向」をふまえることが不可欠である。大雑把な言い方にはなるが、すべての説明文教材は、書き手(筆者)の「表現意図」(目的:何のために、相手:だれに、内容:何を、伝えるか)に基づき、それを具体化した「表現としての特性」(方法:仕組まれた伝え方の特徴・工夫)を持っていると言える。小田氏の言う「筆者の視点・発想の方向」とは、この「表現意図」や、それを具体化するために仕組まれた「表現としての特性」のことであろうと考える。

したがって、教材研究において、まず大事なことは、筆者の「表現意図」と、その具体である「表現の特性」をしっかりとらえることである。以下、読み手が、教材文からの情報に対して自ら探究的な思考を展開し、自らにとっての情報の意味を発見していけるような説明文教材の学習を保証するために、具体的な説明文教材を取り上げて、「教材研究と授業構想の在り方」について考えてみたい。

2、「表現の特性(しくみ)」をとらえる教材研究と授業構想 —— 説明文「じどう車くらべ」(光村一年下)の場合 ——

すべての説明的文章は、書き手(筆者)の「表現意図」に基づき、「内容的価値(筆者の伝えようとした内容から、読み手が体験的に手に入れる価値)」を具体化するために仕組まれた「表現としての特質」を持っている。それは、読み手に対して、伝えたいことをよりよく伝えるための方法や表現上のさまざまな工夫である。

したがって、教材研究においては、まずこの「表現の特質」を明らかにすることが不可欠であり、私たち教師は、それをしっかりとらえることで、その説明的文章と読み手である子どもたちとのよりよい出会わせ方を考えていくことができる。

説明的な文章において、筆者の仕組む「表現の特質」は、それぞれの説明的文章の「内容的価値」の創造と密接な関わりを持っており、その表れ方はそれぞれにおいて独自のものである。しかし、その仕組まれ方には、説明的文章として必ず方法上の共通点がある。その共通点をも

のさしにして、文章の特質（構造やその工夫）を解き明かしていくことができる。「表現意図」に基づく「内容的価値」を創り出すための方法上のものさしには、次の三つがある。

①、対象（題材）の選び方

表現意図を果たすために必要な題材として、「何を」選んでいるか。

* 選ばれている題材には、「表現意図」に基づいて、「内容的価値」を創り出すために必要な要素が必ず含まれている。

②、選んだ対象（題材）への着眼の仕方

表現意図を果たすために選んだ題材の、「どこに」・「どのように」着眼しているか。

* 題材への着眼と題材選択は一つのものである。題材選択がなされる時は、その題材についての表現意図を果たし得る着眼点が明確になっているはずである。

③、対象（題材）への着眼の仕方に合わせた述べ方

題材への着眼の仕方を、読み手を意識しながら、「どのように」具体化（文章化）しているか。

* 読み手の興味を喚起し、筆者と共に探究的に読み進めていけるように、題名、文章構成（序論・本論・結論等を構成する段落相互の関係）、その展開（話題提示→問題提起→問題追究＜事柄の順序、事例と意見・感想の関係、引用やグラフ・図の利用等＞→問題解決）等が工夫されている。

これらに着目し、それらが、表現意図「内容的価値」の具体化にどう関わっているかを明らかにすることが大事である。

◇ 「じどう車くらべ」（光村一年下）の場合

（１）、内容的価値

本教材の「内容的価値：筆者の伝えようとした内容から、読み手が手に入れることのできる体験的な価値」は、次の通りである。

①、自動車の「しごと（機能）」の多様性に気づかせてくれる。

本教材は、自動車とはどのような仕事をしているものなのか、その仕事の多様性に気づかせてくれる。

まずは、「運ぶ」というという自動車本来の仕事の紹介から始まるが、それも、「人」であったり「物」であったりと、運ぶ対象の違いによって、「運ぶ」という仕事にも違いがあることに気づかせてくれる。（対象が同じ「人」であっても、運ぶ目的の違う車もあることを、バス・乗用車を同時に取り上げることで気づかせている。）

そして、次には、「運ぶ」と似ているが、「つり上げて動かす」仕事をする車が紹介され、さらに、最後には、何かを運んだり動かしたりという、自動車本来の仕事とは全く違う意外な仕事をする車が紹介される。

このように、紹介される仕事の多様さやその紹介の仕方の工夫に、読み手は、ふだんあまり意識していなかった自動車の仕事というものに、あらためて興味を惹起させられていくことだろう。

②、いろいろな自動車の「しごと（機能）」と「つくり（構造）」の照応の見事さに気づ

かせてくれる。

「しごと」はそれぞれ違っても、どの自動車も、その「しごと」がうまくできるような「つくり」になっている。その照応の見事さに、読み手は心を動かされることであろう。その説明の仕方にも筆者の工夫が働いている。その説明の工夫によって、「しごと」と「つくり」の照応性への気づきが、読み手自身の探究的思考によって生れてくるよう配慮されている。

読み手にとっての新たな発見と認識を生み出す内容的価値は、①よりも高いものと考えられる。

(2)、表現としての特質

(1) で述べた「内容的価値」をつくり出すために、筆者が工夫して仕組んだ「表現としての特質」には、次のようなものがある。

①、説明対象（題材）の選択の仕方

この説明的文章では、(1) の内容的価値をつくり出すために、バス・じょうよう車・トラック・クレーン車・(はしご車) と、5つの自動車が説明の対象として選ばれている。この5つは、適当に選ばれた対象ではなく、それぞれが意図的に選ばれたものである。

「より一般的な仕事をする車の代表」・「その変形とも言える仕事をする車の代表」・「特殊な仕事をする車の代表」と、読み手にとって、より身近なもの（ほとんどの人が乗ったことがあるもの・利用したことがあるもの：バスや乗用車）から、やや遠いもの（見たことはありよく知っているが、利用したことはないもの：トラック）へ、さらに、かなり遠いもの（している仕事を見たことがあるが、ふだんあまり見かけないもの・どんな仕事をしているか実際に見る機会はほとんどないもの：クレーン車・はしご車）へと、それぞれの「しごと」や「つくり」について理解のしやすいものからしにくいものへ、その関係についても考えやすいものから考えがえにくいものへと、読み手の認識の深まりに合わせて、紹介の仕方を工夫するために必要なものが選ばれている。

②、取り上げた対象（題材）の属性への着眼の仕方

「しごと」と「つくり」の照応の見事さに気づかせるために、それぞれの車の「つくり」の中から、「運ぶ」仕事をするバス・乗用車とトラックでは、それらの構造としての属性の中からあえて「ざせき」（バス・じょうよう車）と「にだい」（トラック）、「まど」（バス・じょうよう車）と「タイヤ」（トラック）を取り上げ、その比較を通して運ぶ対象との関係の整合性に気づかせる工夫をしている。これらの「つくり」は、それぞれの「運ぶ」という仕事の目的をよりよく果たすために、その運ばれる対象にとって必要不可欠な「つくり」である。また、これら「運ぶ」仕事をする自動車と似てはいても、やはり違う仕事をしているクレーン車では、「うでとあし」を取り上げ、それらの自動車の仕事との違いを強調している。さらに、はしご車では、今まで紹介してきた車とは全く違う仕事の特殊性に気づかせるために、挿絵によって、車に設置されている「はしご」や「ホース」といった仕事の内容とつながる「つくり」が、一目で見て取れるよう工夫されている。

これらの着眼の仕方を具体的に解き明かしてみると、次のような工夫が見られる。

ア、「バス」と「じょうよう車」を対比させるために

「バス」と「じょうよう車」を同じ段落で取り上げているのは、仕事（運ぶ）も運ぶもの（人）も同じであるが、仕事（運ぶ）の目的が違う自動車を取り上げることで、両者を比較できるようにしている。「ざせきのところ」は、バスと乗用車では、その示すところが違う。バスは、乗客が乗降しやすくするための通路（ざせきのある所）もふくむが、

乗用車の場合は、乗っている人の座る座席自体を指す。それぞれが広くつくられているのは、人を運ぶそれぞれの目的が違うからである。「ざせきを」と書かずに「ざせきのところを」と書いていることを留意する必要がある。

イ、「バス・じょうよう車」と「トラック」を対比させるために

「運ぶ仕事」としては共通であっても、「運ぶもの」の違いによって、必要な「つくり」に特徴があることを、

ア、どこを「ひろく」するか？

イ、何を「たくさん」つけるか？

に着目してとらえている。人を運ぶためには、「ざせきのところ」を「ひろく」して「まど」を「たくさん」つけておく必要がある。物を運ぶためには、「にだい」を「ひろく」して「タイヤ」をたくさんつけておく必要がある。そのことに気づかせ、その理由を考えさせるために、たくさんある「つくり」の中から、このような「つくり」に着眼しているのである。

ウ、「ばす・じょうよう車」や「トラック」と「クレーン車」を対比させるために

「バス・じょうよう車」と「トラック」の仕事やつくりを対比させた後、何故クレーン車をもってきたのか。そこには、必然的な理由がある。

「バス・じょうよう車」と「トラック」は、運ぶもの（人・物）は違うが運ぶという仕事は共通している。それに対して、「クレーン車」は、「運ぶ」という仕事ではないが、それと似た「つり上げる」仕事をしている。前者の「運ぶ」仕事の対象をより遠く横に移動させるのに対して、後者は、対象を上下（前後左右にも）に移動させるのである。また、前者は、車自体も移動するのに対して、後者は、車自体は、その場にしっかりとどまっていなければならない。

「クレーン車」の「つくり」として、「のびたりうごいたり」する「じょうぶなうで」や「しっかりしたあし」が選ばれているのは、人や荷物を遠くまで運ぶ仕事と比べさせ、物を上下左右に移動させるための「つり上げる」という仕事の特徴をとらえやすくするためであり、その仕事に合った「つくり」になっていることに気づかせるためである。

エ、最後に、「はしご車」が登場する理由

「はしご車」の「しごと」を説明する言葉は、これまでの車の仕事を説明する言葉と比べると、明らかな違いがある。「かじのときにはたらくじどう車です。」というふうには、仕事の中身がはっきり書かれず、「仕事をする」の言い換えでしかない「はたらく」という抽象語が使われ、それまでの「～しています。」という文末が、「～するじどう車です。」という表現に変わっている。また、「どんなしごとをしていますか。そのために、どんなつくりになっているのでしょうか。」と問いかけることで、「しごと」の具体的な中身やそのための「つくり」の工夫を、読み手の想像や思考に任せている。

これは、今までの事例を通して習得してきた車の「しごと」や「つくり」についての知識や、その関係のとらえ方を活かして、自力で考えてみようというはたらきかけなのである。つまり、それまでに登場してきた事例によって、車にとっての「しごと」とは、どういうものなのかを理解し、そのうえで、それがうまくできるための「つくり」について、どこがどうなっているから仕事がしやすいのかをきちんと説明できる力を身に付け、その力を活かして取り組んでほしいという筆者の願いが、そこにある。

③、対象（題材）への着眼に合わせた述べ方

上述のような題材への着眼を具体化するために、筆者は、説明の仕方にさまざまな工夫を凝らしている。

ア、題名やその提示の仕方の工夫

「じどう車くらべ」という題名そのものにも、「何を比べるのだろうか？」という、読み手の探究心を惹起する工夫が見られるが、それを受けた「はじめ（序論）」の段落の話題提示文「いろいろなじどう車が、どうろをはしっています。」の示し方にも工夫がある。この一文だけでは、その示す内容は具体的にイメージできないが、下に示された挿絵とつなぐことで、「いろいろなじどう車」の「いろいろな」の中身が分かるようになっている。

そこに描かれているのは、郵便配達車・パトカー・タクシー・ダンプカー・ゴミ収集車等、絵を見ているだけで、種類の多様性だけでなく、その「つくり（構造）」や「しごと（機能）」の違いが明確に意識される自動車である。題名と話題提示文を挿絵とつないで読むことで、読み手は、次に示される問題提起文の内容を先取りできるようになっているのである。「自動車の何を比べるのかな？」「いろんな自動車が走っているなあ。」「していることが、みんな違う自動車だ。」「かたちもいろいろだなあ。」といった気づきが、挿絵の観察から生まれてくる。その気づきは、次の問題提起文の内容とつながっていく。

イ、文章構成の工夫

「ア、はじめ：話題提示・問題提示→イ、中：事例説明」→（ウ、読み手への呼びかけ）と、読み手の探究意識にはたらきかけ、自ら興味や意欲を持って読めるように意味段落の構成が工夫されている。（新教科書では、ウは「手引き」的扱いになっている。）

「ウ、読み手への呼びかけ」（学習の手引き欄）に出てくる最後の事例（はしご車）については、「しごと」の表し方が「かじのときにはたらくじどう車です。」と、具体的な仕事の内容を、読み手自身に説明を求める新たな問題提起がなされているが、説明文としては、「まとめ」段落のない頭括型の文章である。事例として紹介された三つの自動車の「しごと」と「つくり」の「照応の見事さという共通点」についての「まとめ」の説明が省かれているのである。この省略をどう受けとめるかは、単元全体の目標の設定の仕方に関わっているが、その扱いは、指導者の判断に任されていると言える。しかし、「はしご車」の「しごと」と「つくり」の具体的内容をつくる活動や、自力でその他の自動車を取り上げて「自動車図鑑づくり」に取り組む活動の前に、この「まとめ」にあたる段落内容を考える活動は不可欠であろうと考える。それが抜けると、説明文の読み解きによって習得した「自動車の機能と構造の照応性」についての気づきが、「自動車図鑑づくり」に活かされなくなってしまうおそれがある。

ウ、事例説明の順序の工夫

（２）の「①、説明対象（題材）の選択の仕方」でも述べたが、「しごと」と「つくり」の照応についての説明する段落では、その事例としては、バスと乗用車→トラック→クレーン車→（はしご車）の順に紹介している。

この紹介の仕方をみると、一般から特殊へという認識の普遍的な型をふまえた説明の順序になっている。また、題名にあるように、じどう車相互の「しごと」や「つくり」の対比が、無意識的に行われるように、配列を工夫している。

エ、事例説明の型をそろえる工夫

事例説明の段落内では、示される事例の比較を容易にするために、各段落の内容を、いずれも「しごと」→「つくり」の順で示し、両者のつながりを理解させるために「そのために」というつなぎ言葉を間にはさんでいる。その表現の形は、「～は、・・・を～するしごとをしています。」と全てそろえることで、それぞれの仕事の内容理解だけでなく、その比較もしやすくなっている。

オ、事例説明の仕方の工夫

どの自動車においても、「つくり」の説明の中に、「しごと」との照応性を意識させる修飾表現が巧みに組み込まれている。「バスやじょうよう車」では「ひろく」・「そとのけしきがよく見えるように、・・・たくさん」、「トラック」では「うんてんせきのほかは」・

「たくさん」、「クレー車」では、「「じょうぶな・・・、のびたりうごいたり」、「車たいがかたむかないように、・・・しっかりした」など、それぞれの「つくり」のありようの説明が、それぞれの自動車の「しごと」との照応性を考える手がかりとなっている。

カ、事例説明を補助するさし絵配置の工夫

説明対象となる車のそれぞれについて、「しごと」や「つくり」の理解を助けるさし絵が添えられている。

(3)、授業構想における留意点

単元「じどう車のひみつをさぐろう！」

- * 本単元は、(1) 教材文に説明されている「じどう車のひみつ」とその説明のされ方を読み解く活動と、(2) 読み解いた「ひみつ」やその説明のされ方を活かして、自ら選んだ「じどう車のひみつ」を探り、「じどう車ずかん」として表現する活動とで構成される。
- * ここでは、(1) の読み解きの活動に視点を当てていく。(2) は省略する。

①、読み解きの活動への課題意識を高め、探究意欲をかき立てる。

それぞれの自動車の「しごと」と「つくり」のありように対する興味・関心を高め、筆者が投げかけている二つの問いを、読み手である子どもたち一人一人にとっての「わが問い」となるような教材文との出会わせ方を工夫したい。また、この説明的文章の中で、理解を共有しておくことが不可欠な言葉として、「しごと」・「つくり」の意味を、具体的なイメージと共に理解させる手立ても工夫することが必要であろう。

方法としては、例えば、教材研究のところで述べたように、題名・「はじめ」段落の話題提示文を挿絵とつなぐことで、道路を走っている「いろいろなじどう車」の「いろいろ」の中身に気づかせていくことができるだろう。それぞれの自動車を観察する学習を通して、その種類・仕事・形（つくり）の違いに気づかせることで、それらに対する興味・関心を惹起することができるのではないかと考える。挿絵を見せながら、次のような問いかけをしてみよう。

- T 1、好きな自動車を見つけてその絵を描いてみよう。好きなわけを絵の中に書き込んでみよう。(挿絵の中になれば、自分の好きな自動車を思い出して描かせる。)
- T 2、おたがいの好きな自動車とそのわけを発表し合おう。

T 1の後のT 2のはたらきかけによる、一人一人の好きな理由のを発表の中には、それぞれの車の「しごと」に関わるものと、「つくり」に関わるものが必ず出てくるものと考えられる。それらを板書で整理することによって、好きな理由としての「しごと」や「つくり」のありようを、その具体的なイメージと結びつけたかたちで理解させることができるはずである。

②、活動目標「くらべて よもう」の「比べ方」を焦点化する。(一人学習)

教材研究での分析に立って授業展開を考えるならば、まずは「くらべる」ことを読みの中核において取り組むことが重要になってくる、その具体的な進め方としては、

- 1、バスとじょうよう車を比べて読む。
- 2、トラックを、バス・じょうよう車と比べながら読む。
- 3、クレーン車を、バス・じょうよう車やトラックと比べながら読む。
- 4、はしご車を、今まで紹介された車と比べながら読む。

というふうに、それぞれの車の「しごと」や「つくり」をとらえさせたり、その照応について考えたりさせる際に、たえず既出の車との比較を通して、その共通点・差違点に気づけるような、キーワードとなる表現に着目させることが大事である。

これまでの説明文教材の読みにおいては、書かれていることを、書かれている通りに読む、「叙述をなぞり、切り取り、整理する」だけの読みが多く見られた。

- T 1 バスやじょうしょう車は、どんなしごとをしていますか？
 T 2 そのために、どんなつくりになっていますか？
 T 3 それぞれの「しごと」と「つくり」を表にまとめましょう。

このように、説明文冒頭に提示された2つの問いにもとづき、それぞれのじどう車の「しごと」とそれに合う「つくり」を、上に示したような発問によって読み取り、その違いを理解させようとする学習である。

しかし、「比べて読む」とは、「さまざまな叙述から、問いに合う叙述を見つけ、抜きだし、整理して、その違いを理解することだけではない。それぞれの自動車の「しごと」とそれに合った「つくり」を**比べて読む**ということは、**違いを知るだけでなく、違いについて考えること**であり、それによって**気づくことや分かること**もふくまれる。

- C 1 同じように運ぶ仕事をしていても、運ぶものが違うと、広くするところやたくさんつけるものが違うんだ。それは、きつと…
 C 2 「バスとじょうよう車」の「ぎせきのところ」って同じではないけど…

このような気づきが、子どもたちの内に生まれてくるのが、「比べて読む」ことなのである。そのためには、表による「しごと」と「つくり」の違いの整理をさせるだけでなく、その整理の過程での上述のような気づきを生み出すはたらきかけも用意しておきたい。

- T 4 バスと乗用車の運ぶ人を、比べて気づくことはないですか？
 T 5 「ぎせきのところ」って、どこですか？
 T 6 バス・乗用車とトラックの「ひろく」なっているところや、「たくさん」付いているものが違うのは、どうしてですか？

このようなはたらきかけによって気づいたことを、書き込んだり、書き出したりさせていくのである。ただ、ひらがなの習得学習がやっと終わった一年生の二学期の段階に、まだ思いや考えを文章化する力も十分育っていない子どもたちが、初めて取り組む説明文学習である。「比べ読み」においては、それが可能な無理のない授業展開を工夫する必要がある。

まずは、「一人学習」で、「しごと」と「つくり」の違いを比べられるような表のあるワークシートを与える。また、違いに一目で気づけるように、キーワードを書き抜いていけるような枠を設け、部分視写をさせる。そして、前述の「②比べ方を焦点化する」の1～4の比べ方に合わせて比べさせ、気づいたことを挿絵の中に言葉で書き込ませていく。(表の下欄に書き出させてもいい。)

最後に、ワークシートの左端には、それぞれの自動車の「しごと」と「つくり」の照応性を見事さについて、他の自動車との比較で気づいたことを、短く文章化できる欄も設けておきたい。(これは、次の話し合い学習で、口頭で発表させてもよい。)

③、互いの気づきを発表し合い、互いの「気づき方」を比べる。(交流学习)

交流学习では、前半をそれぞれの自動車の「しごと」・「つくり」について、各自がワークシートの表で整理したものを発表させ合い、板書で整理して確かめ合わせる。それを土台にして、さらに各自の書きこみや書き出しによる気づきも引き出すために、必要であれば、時機を見て、教師側から②のT4・T5・T6のような「しごと」と「つくり」の照応性に気づけるような発問もしてみたい。それによって、C1やC2のような気づきが出てくるはずである。

④、説明文「じどう車くらべ」での習得を、「じどう車ずかんづくり」での活用に生かす。 (探究・表現活動)

(略)

3、まとめ

説明的な文章の読み解きは、書かれた文章をなぞり・切り取り・整理するだけの言語操作主義的な読みや、書かれ方から乖離した経験的知識に基づく「内容」の読みから抜け出さなければならないが、その方法と実践がいまだに明確に示されていないのではないか。書かれ方を通してしか書かれた内容は読み取れないし、読み手の必要感と目的意識は、書かれた文章の対象への着眼の仕方と無関係には見えてこない。筆者の仕組んだ書かれ方としての「表現の特質」を、指導者が明確にとらえることによって、はじめて子どもたちの探究的な読み解きの場づくりやはたらきかけが見えてくるのである。説明的文章の授業改善は、ここから始められなければならない。

ここでは、一つの低学年教材を例にしてそれらのことを考えてきた。中学年教材・高学年教材についても、いつか改めて考えてみたい。(もちろん、さまざまな文種の説明的文章も取り上げてみる必要がある。)